

年退社)

一、昭和四十一年一月二十九日 全日本銃剣道連盟

銃剣道 四段 証を受ける

職 歴

一、昭和五十七年十一月二十五日交付 ボイラー主任

者 資格授与 滋賀第一四七九号

一、昭和六十年六月二十八日 酸欠 危険作業 主任

者 資格授与 滋賀第一四七九号

一、全抑協近江八幡市会計並会長歴任

一、軍恩連盟近江八幡連合会副会長並会計歴任

現近江八幡市幹事

一、近江八幡市英霊にこたえる会会計歴任

一、市立金田小学校校友会現副会長

一、平和祈念建立事業慰霊碑寄附協賛

一、太平洋戦争戦没者慰霊協会の会員

一、滋賀県連合会幹事拝命(平成八年六月)

誠に貴重な人材であります。

(滋賀県 大更 良三)

ツンドラの墓

岩手県 及 川 新 蔵

私たちは横道河子で終戦を迎えた。持っている武器弾薬は全て一カ所に集められ、我々は丸腰になった。武器以外の物は雑のうと小さな大幕一枚、あとは夏衣、着の身着のまま何一つなかった。今まで肩で風を切って歩いていた日本軍人に満人の子供たちが石を投げ、傍らに寄って来て唾を吐きかけても、何もすることができなかった。その夜、ソ連軍の戦車の大群は轟々たる地響きを立てながら、我々の目の前を通過して行った。彼らは、女性兵士の嬌声を交えながら戦車の上で酒を飲み、ブラスバンドで歌を歌い、狂気乱舞の言葉ピッタリのはしゃぎようであった。

人が人を殺し合って何ら罪悪感を感じない。いや、感じさせないようにコントロールさせられているのが戦争というものなのだろう。そして殺し合いに勝った

者が敗者を裁き、その生命財産の殺生与奪の権利をほしいままにする。

武田という上等兵がいた。どこの出身でどこの原隊であつたのか、皆目忘れてしまったけれども、小柄でキリッとした顔立ちであつただけ奇妙に覚えてゐる。シベリアの収容所で当初より少しは給与のよくなつた昭和二十一年五年ごろのことだつたと思う。私が飯上げ当番を指揮する班長を命ぜられ、炊事場から洞窟兵舎まで運んでいる途中で、武田は相棒の目をかすめて隠し持っていた缶詰の空き缶にその飯をかつさらうという事件があつた。勿論武田はその場で私の平手打ちを食ひ、皆からもこつびどく非難されたことは言うまでもない。何しろ食料が足りないなどというものではない。足りないのではなくてないのだ。ある時こんなことがあつた。飯上げに行つて来たというから行つて見たら、シャブシャブの塩湯である。理由を聞いたら、食料に困つたソ連民間人が収容所の倉庫を襲ひ、食料が掠奪されて穀物は何もない。わずかに塩漬があつたから、それを切つて煮て配給をしたというのである。

塩湯に鯀の皮とか骨がわずかに見えるものを鯀の空き缶に一杯すり、昼食用に麩で作つたと思われるカサカサのパン二片もらひ、勿論朝食にその場で食べてしまつた。したがつてお昼は何もなし、水を飲むだけ。そんな事が何日か続き、それでもあの零下四〇度の寒さの中にほうり出されるのだからたまつたものではなかつた。次から次へと栄養失調患者が増えるばかりであつた。

武田の事件は少しはそれを通り越してゐたとはいへ、明日の命の保障のない毎日となると、ずるい生き方をした人間はこつびどく皆に糾弾される。武田は爾来、急激に元気がなくなつた。行動がおかしいのである。ブツブツ訳の分からない一人言を言いながら、わずかばかりの分け前の食料を飯盒にあげ、水と塩を入れて煮立てて増やし、どろどろにしたものを食べるようになった。明らかに栄養失調からくるむくみも見られ、顔色も土気色に変わつてさえない顔つきになつて行つた。今考えるに、いろいろな病氣、腎臓病などを併発し、尿毒症などもあつたのではないかと思う。ある日、

コロッと帰らぬ人となった。かわいそうなことをしたものだ。真面目な武田は盗み食いをしなければならぬいほど生理的に追いつめられていたのであろうし、それを助けてやれなかった我々が不甲斐ないと言えば不甲斐ない。しかし、実際その時は、明日私がそうなるかもしれないのだ。他人様の事など考える余裕のある人は恐らく一人もいなかったのだ。

霊安室と言えば聞こえがいいが、死人を置く、バラツクの小屋があった。シベリアで死んだ人間は、真夏以外、冷凍人間である。立っていて肛門の穴が見えるほど無残に痩せ細った冷凍死体は、裸のままうず高く積み上げられている。彼らに言わせると、死ねば人間といえども物体である。物体に着物を着せるなどというのは不経済だ。したがって裸で構わない。人ソ当初の衣食住の劣悪さ、それに続く過酷な労働によって、当初の半年くらいのうちにバタバタ倒れる人が多かった。一日に十五人、二十人と死ねば、その処置が大変なことだったであろう。ある深夜、死体置場でその冷凍人間をトラックに積み込むソ連人がいた。首と足を持って

ば真っ直ぐな死体は材木を積むように積むことが出来る。私は茫然として、あの凍てつくシベリアの闇夜に立ち尽くしたのであった。私の推量になるが、私のいたところは露天掘りの炭坑であり、したがって膨大な土捨て場があった。死体をあの土捨て場に捨てて、その上に土をかければ簡単に処理できたのではないか。曲りなりにも穴を掘って埋めるようになったのは次の冬からだたと記憶している。

シベリアの抑留地にはいろいろな病気があった。その総てが栄養失調からくるチフスとか肺炎。およそ二十代、三十代の人たちに、普通の生活状態では考えられない本当に珍しい病気が多かった。発疹チフスが虱の蔓延によることを知ったソ連当局が、衣服の熱気消毒によってその卵を殺し、その消毒時間に手桶一杯のお湯の供給を受けて体中の垢を流すというささやかな入浴ができるようになったのも、抑留生活が始まって相当時間が経ってからである。このような病気のほかに皮膚病の疥癬又はビタミン不足による夜盲症などもあった。皮膚病で人が死ぬなどということは、この平

和な今の日本ではおよそ考えられないだろう。シベリアで流行した疥癬は相当人の命を奪った。普通発症は皮膚の柔らかいところから始まるけれども、重症となれば全身とこころ構わず真つ赤に腫れてくる。そのかゆみは何とも、体中を掘り起こしたいほどかゆいのだ。「疥癬中隊」と称して重度の疥癬患者だけの兵舎があったが、彼らの入浴する姿は、あたかも皮をむかれた白兎の行列を思わせるものであった。栄養が悪く不潔で、

ろくな薬が無い。しかも雑魚寝となれば、伝染性のある疥癬が蔓延したのは無理からぬことであった。私はそれほど重症ではなかったが、ふくらはぎに今もって消えない病痕があって、その痒みの非道さは今もって忘れられない。

シベリアの墓地に佇んで抑留のころに思いを馳せれば、次から次へと思ひ出されることばかりで尽きることはない。しかし、何と言っても、死んで行った戦友たちのやり切れないほど瘦せこけた青白い顔の一つ一つが脳裏から永久に離れることはないだろう。土捨て場の土と一緒に土に還った者。申し訳だけの穴に埋め

られた者は狐狸や野犬などの餌食になったかもしれない。こうして本当の墓のあるのは一体どれだけだろう。全死者の一割もあるだろうか。あとは墓標のないツンドラの墓なのではあるまいか。せめて生きて還った我々が、彼らのことを忘れないで、彼らの待ち望んだ「ダモイ東京」を実現させてやりたいものである。

【執筆者の紹介】

現 住 所 花巻市小瀬川五一〇

学 歴 花巻農学校卒業

満鉄富拉爾基農業修練所入所

入 隊 揮春一三一二五部隊甲斐隊入隊

石頭予備士官学校入校

帰国年月日 昭和二十二年四月二十二日

復員後、農業に従事

昭和五十五年より全抑協花巻支部理事兼会計

(岩手県 菅原 義三)